

「国立台湾大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学医学部 1年 宮本拓実

中国語の授業 45 コマと台湾の文化についての講義 3 コマが行われた。中国語の授業に関しては、プレイスメントテストによって4つのクラスのいずれかに振り分けられた。私のクラスでは中国語を使って授業が行われたため、聞き取ることができなければ厳しいと感じた。実際私は授業初日には先生が言っていることがわからないことが多々あった。ほぼ毎日小テストが行われ、単語や語法の定着が図られた。繁体字のテキストで先生も繁体字を使って教えていたが、特に問題は感じなかった。また、スライドには先生が簡体字も一部併記してくださった。授業を通してリスニング力とアウトプットする力が上がったと思った。特に宿題でエッセイ等を書いてきて添削していただいたのはとてもためになった。今後も中国語の学習を続けようというモチベーションが大いに高まった。当たり前だが中国語は英語とは違った理解の仕方をするので、英語とは大きく異なる言語の学習を通して、より多くの視点から一つも物事を見ることができるようになると感じることもできたからだ。先生に中国語を添削していただいた際に、私の中国語は中国語的な文脈の取り方をまだ身につけていないと感じ、そういう意識が高まった。文化に関する講義では個人的には歌仔戲という演劇の話が面白かった。中華圏の演劇といえば京劇しか知らなかったもので、より視野が広がったと思う。

英語の有用性も十分に実感できたとし、ある程度の自信もついた。今回のプログラムには日本以外の数か国からも参加者がいたが、彼らと話すときは基本的には英語で話した。彼らの中には中国語がうまい人もまだ初心者だという人もいたが、英語に関しては皆コミュニケーションするに全く問題ないレベルに達していた。プログラム前は英語を話すことに全く自信がなかったのだが、話してみると英語の非ネイティブとの会話であれば最低限は会話できることがわかってよかった。ただ聞き取れないことがあったり、言葉に詰まることがあったりと、まだ十分に使いこなせているわけではないのでより磨いていかなければならないと考えた。街中では片言の中国語と、英語が話せると特に困ることはなかった。

日本語の雑誌が書店においてあったり、日本語教室の看板が掲げてあったりするのを見て、台湾では日本の存在感も大きいのだと感じた。もちろん中華圏らしさも様々なところに垣間見えた。例えば、寺に描かれている人物が中国の歴史上の人物であったり、祀られているのが中華圏の神だったりした。また、大陸からやってきた人々が暮らした地域についての説明を受けて、台湾も原住民はいるものの移民の国なのだと感じた。

現地語ができる大切さも感じた。現地語ができる方がコミュニケーションもよりスムーズになり、より充実した生活を送れるのだとわかった。

今後の進路への影響に関してはわからないが、留学への意識と意欲が高まったのは事実だ。今回のプログラムを通して、台湾の人だけでなく様々な国の人とそれぞれの国について話すことができたのは本当に刺激的だった。